

# 美術部へようこそ! & 教室を飛びだして

## ▼ オニノコプロジェクト

薄暗い洞窟で、睨みを利かせる無数の鬼瓦。  
これは、香川県の中学校美術部員が制作し、「瀬戸内国際芸術祭2019」に出展している作品です。  
県内の美術部どうしが連携し、美術を通じた社会貢献や交流に取り組む  
「オニノコプロジェクト」をご紹介します。

### 中学生がアーティストに

「オニノコプロジェクト」は、香川県の中学生が主体となって、美術を通じた社会貢献を旨とする取り組みだ。母体となるのは、香川県中学校美術教育研究会。美術部どうしの交流や、生徒が主体的にワークショップを企画・運営し、地域に貢献することなどを主たる目的としている。

プロジェクトはもとも、2013年の瀬戸内国際芸術祭(瀬戸芸)で、県内の中学生もアーティストとして参加すべく発足した。当時は県内の中学生約3000人が、県の伝統工芸品の一つである鬼瓦(讃岐装飾瓦)を制作し、別名「鬼ヶ島」と呼ばれる女木島の洞窟に展示した。この取り組みが、プロジェクト名の由来となった。

以降もプロジェクトは継続し、美術部が連携して合同研修を行ったり、ワークショップを開催したりしてきた。そして、今年の瀬戸芸では、2013年から展示されている女木島の鬼瓦をさらにグレードアップさせようと、新たに鬼瓦を追加制作することに

なった。今春に参加を呼びかけたところ、香川県内の中学校17校が手を挙げた。

### 「鬼瓦親分」を追加制作

6月1日に香川県立ミュージアムで開かれた合同制作会には、県内から130人以上の中学校美術部員が参加。讃岐装飾瓦の伝統工芸士・神内俊二じんないしゅんじさんを講師に招き、1校につき1枚ずつ、鬼瓦の制作に取り組んだ。

今回制作したのは、2013年に作った鬼瓦よりも一回り大きい「鬼瓦親分」。神内さんが作業手順について説明した後、生徒は事前に準備しておいた下絵をもとに、縦45センチメートル、横35センチメートルの粘土板をへらで切り取っていった。鬼の顔が描かれた下絵は、かわいらしいイラスト調のものもあれば、睨みを利かせた迫力たっぷりのものも。ベースとなる背面が出来上がったら、その上に粘土のパーツを盛りつけて、立体的に仕上げた。

半日の作業を終えた後は、生徒から「普段使っている粘土と違い、すぐ乾いてしまうから大変だった」「ま

ゆ毛とか細かい部分の形を整えるのが難しかった」といった感想が出され、伝統工芸の難しさを肌で実感したようだった。

### 展示して終わりではない

合同制作会では、鬼瓦のほか、各校が卵ほどの大きさの焼き物を制作していた。これは、瀬戸芸の会期中、鬼瓦の展示会場で開催するワークショップの素材として使うもの。プロジェクトの本質は、作品制作や展示そのものではなく、美術を通じて人々との交流を深めることにある。そこで、会期中は生徒たちが展示会場に出向き、来場者や地元住民と触れ合うのだ。

生徒たちは、鑑賞者とのように関わっていくかを考える中で、「オニノコプロジェクト」が個人の活動ではなく、チームで活動するものだと気づいていく。香川県立ミュージアム学芸員の高嶋良子たかしまりょうこさんは、「美術を媒介として人々とつながることで、生きる力につながるものを見つけられる場を提供し続けたい」と力を込めた。

※「瀬戸内国際芸術祭2019」は現在、秋会期「ひろがる秋」が開催中。11月4日(月)まで。詳細については、下記のサイトをご参照ください。

瀬戸内国際芸術祭2019  
<https://setouchi-artfest.jp/>



- 1/ 合同制作会で「鬼瓦親分」の制作に取り組む生徒たち。
- 2/ ワークショップ用に制作した直径約5センチメートルの小物。
- 3/ 女木島の洞窟内に展示された鬼瓦。
- 4/ 展示会場周辺でのワークショップの様子。ある中学校は、合同制作会でつくった小物を輪投げの景品にして、来場者と交流していた。

放課後  
第16回  
ART